

澤田大使と經濟使節

澤田大使は聖州官民は嘗て見ない特異な關心をもつて迎へたようである。恐らくそれは大使自身の通商方面に多分の経験と抱負とを有し、伯國へ赴任に際しては日伯兩國の通商關係促進をその最大の目的とし、五月來伯する民間經濟使節も大使の奔走と力あるを知れるためであらう。聖州執政官も四日夜大使の歓迎晩餐會席上に於て最初に經濟使節來訪のことと言及し、聖州と日本との關係はこの使節の努力によつて更に緊密の度を加へるであらうこと期待してゐる。日本移民の勤勉な點を稱揚し聖州農業への努力補給のみが得ない。

伯親善の模であるかの如く述べられて來た從來のこの種會合に於ける歓迎の辭に想到するとき實に隔世の感に打たれざるを得ない。

素より生々しい二分法制定の直後であり政治的にも中央に於て壓された氣である今日、聖州が事實上如何に努力次第に悩んで他を謂ふ態度に出た節などは稱し難いが、猶豫執政官乃至州統領にして日本大使歡迎の辭に日本移民に言及しなかつたこと今回を以てこう矢とすべきこの事實は一面聖州が農業者であるといふ以外公の席に置いて詳しく述べるものである。大使は經濟使節については當日本財界、實業界の有力なる代表者の來着を待たなければ知る由もないが、すでにイタマチーでは一月來特に委員會を任命して使節を迎へるために萬端の準備を整え、マセド外相は關係係と連絡をとり使節の訪問をして最も効果的ならしむべく努力してゐる模様で、これを以てしても大使の該使節に對する態度の一端を窺知することが出来る。歷代の大使がコンセツヨン思者の爲に太鼓を叩き移民問題で後手ばかり打つて來た間

に、眼を大局に注ぎブラジルが先づ何を求めるかを考へ

たる心をもつて迎へたよう

である。恐らくそれは大使自身の通商方面に多分の経験と抱負とを有し、伯國へ赴任に際しては日伯兩國の通商關係促進をその最大の目的とし、五月來伯する民間經濟使節も大使の奔走と力あるを知れるためであらう。聖州執政官も四日夜大使の歓迎晩餐會席上に於て最初に經濟使節來訪のことと言及し、聖州と日本との關係はこの使節の努力によつて更に緊密の度を加へるであらうこと期待してゐる。日本移民の勤勉な點を稱揚し聖州農業への努力補給のみが得ない。

伯親善の模であるかの如く述べられて來た從來のこの種會合に於ける歓迎の辭に想到するとき實に隔世の感に打たれざるを得ない。

素より生々しい二分法制定の直後であり政治的にも中央に於て壓された氣である今日、聖州が農業者であるといふ以外公の席に置いて詳しく述べるものである。大使は經濟使節については當日本財界、實業界の有力なる代表者の來着を待たなければ知る由もないが、すでにイタマチーでは一月來特に委員會を任命して使節を迎へるために萬端の準備を整え、マセド外相は關係係と連絡をとり使節の訪問をして最も効果的ならしむべく努力してゐる模様で、これを以てしても大使の該使節に對する態度の一端を窺知することが出来る。歷代の大使がコンセツヨン思者の爲に太鼓を叩き移民問題で後手ばかり打つて來た間

に、眼を大局に注ぎブラジルが先づ何を求めるかを考へ

たる心をもつて迎へたよう

である。恐らくそれは大使自身の通商方面に多分の経験と抱負とを有し、伯國へ赴任に際しては日伯兩國の通商關係促進をその最大の目的とし、五月來伯する民間經濟使節も大使の奔走と力あるを知れるためであらう。聖州執政官も四日夜大使の歓迎晩餐會席上に於て最初に經濟使節來訪のことと言及し、聖州と日本との關係はこの使節の努力によつて更に緊密の度を加へるであらうこと期待してゐる。日本移民の勤勉な點を稱揚し聖州農業への努力補給のみが得ない。

伯親善の模であるかの如く述べられて來た從來のこの種會合に於ける歓迎の辭に想到するとき實に隔世の感に打たれざるを得ない。

素より生々しい二分法制定の直後であり政治的にも中央に於て壓された氣である今日、聖州が農業者であるといふ以外公の席に置いて詳しく述べるものである。大使は經濟使節については當日本財界、實業界の有力なる代表者の來着を待たなければ知る由もないが、すでにイタマチーでは一月來特に委員會を任命して使節を迎へるために萬端の準備を整え、マセド外相は關係係と連絡をとり使節の訪問をして最も効果的ならしむべく努力してゐる模様で、これを以てしても大使の該使節に對する態度の一端を窺知することが出来る。歷代の大使がコンセツヨン思者の爲に太鼓を叩き移民問題で後手ばかり打つて來た間

に、眼を大局に注ぎブラジルが先づ何を求めるかを考へ

經濟外交刷新に 通商局の充實案

（續）

時話の題

三年越しの交渉で北鐵讓渡遂に成功

(上) 日露關係愈よ好轉

三、怪文書出現

◆月經不順◆

未會有の棉作地
募集

口新刊書籍

讀んで直ぐに役に立つ實用専門の書籍
社會、世相の表裏を知り常識を豊かに識
見を高めるには先づ文藝書を繙く事です
新刊書籍が便船毎に入荷してます
御下命は弊店へ、誰方も今直ぐお求め下
さい

●借地料

ソロカバナ線ファシーナ驛を中心として二〇キ

ロ以内、聖市より僅か九時間日本人宋開拓の地

にして氣候最良害虫絶無

●貸付金

前借一アルケールに付四〇〇ミルを許す、全て

貸付は後拂ひの事

●特典

農業用必需品アラード、カルビディラ、ブロ

等を買與す、尙又聖市よりの無貨輸送の便を計

算する

●理賃

一アルケールに付百五〇ミル

●理賃

前借一アルケールに付四〇〇ミルを許す、全て

貸付は後拂ひの事

●理賃

前借一アルケールに付四〇〇ミルを許す、全て

貸付は後拂ひの事</

號十三百九第

理化研究所の岩田元兄氏は、數年前白米の中に含まれてゐる毒物の研究に着手して、學界のセンサインションを巻き起したが、昨秋廣沢の實驗を終り興味ある結論を得て、「白米の毒物含有論」といふ論文でこの程農學博士號を授與された。

いて三人位の割合で、
ひつたりと合はないのが出て來るので、どうも學術的にはさう
ことはつきりしたことは云へない
のですが、九十三%合ふとする
と勿論否定は出來ません、そこ
より深い意味でなくまあ軽い
意味の關係と考へて、分類する
事……

▼弓状紋の人には
社交性、神經過敏、感情不變
沈着、無愛嬌、議論好き、勝
氣な人が多く

▼乙種蹄狀紋の人には

□：赤ちゃんを育てる樂しみな
中にも何といつても厄介なのは
おむつでせう、しかし赤ちやんの
健やか发育の上に、又良い
習慣を付ける上に、このおむつ
ほど大切なものはないで、そ
の用ひ方には十分な注意を拂つ
ていただきたいと思ひます

□：まづこれまでの長方形のお
むつ、あれは一巾の布で兩側から
ら合せるやうにして巻くもので、
すから、生後二ヶ月位まではい
いとしても、それ以後になると
赤ちゃんの足の運動をさまたげ

(私) 〇名について最近調査した結果
達の指紋と性格との間にはどのやうな關係があるか、男子學生一四
本によりますと……

指紋を見れば 其の人の性格が判

ハテ貴方はどの部類に



△毛織物の適當な洗濯法、毛物の洗濯について最も注意を要するものを漬け、よく押へるやうに洗濯することは熱湯を使はないことより、熱湯を使用しないことです。また、熱湯を注ぎかけて浴かします、純良のものはこの必要はありません、十分冷水で洗濯します。

使命を果して 澤田大使、けふ退聖す

既報の通り澤田大使は三浦書記官帶同去三日午後六時四十分ノルテ驛着列車で入聖、驛頭には執政官代理マルシオ交通長官以下各省長官、第二軍管區司令官州警兵隊長等の高官、市毛總領事以下在留官民多數出迎へたが大使は出迎人に挨拶後州政府差廻しの自動車で儀仗兵に護られエスプラナーダホテルに向つた

經濟使節横濱發英紙 黃禱を唱ふ

小學校教員なるべき師範生及び中學生二十名（可成男子）採用の見込み）、ル授與

二、學費は醫科、法科毎月三百ミル、師範及び中學生二百ミル

三、卒業後義務不履行の場合は

四、志願者は願書（適宜）履歴書

五、育英生は品行方正且つ資産なく上級校に入學不能者に限る

六、願書は各地方父兄會支部に推薦方を申出で同支部經由申込は

七、育英生は可成邊遠の地に在

八、伯人學校内に

九、日本語科設置

十、アラサツーパー市で

十一、マツトス・バレットス

十二、耳鼻咽喉科

十三、ドクタードクタード

十四、アラサツーバ市ドンベ

十五、リリーボマード

十六、オーリッソバソ

十七、トランシットス

十八、太陽堂

十九、リリーボマード

二十、太陽堂

二十一、リリーボマード

二十二、太陽堂

二十三、リリーボマード

二十四、太陽堂

二十五、リリーボマード

二十六、太陽堂

二十七、リリーボマード

二十八、太陽堂

二十九、リリーボマード

三十、太陽堂

三十一、リリーボマード

三十二、太陽堂

三十三、リリーボマード

三十四、太陽堂

三十五、リリーボマード

三十六、太陽堂

三十七、リリーボマード

三十八、太陽堂

三十九、リリーボマード

四十、太陽堂

四十一、リリーボマード

四十二、太陽堂

四十三、リリーボマード

四十四、太陽堂

四十五、リリーボマード

四十六、太陽堂

四十七、リリーボマード

四十八、太陽堂

四十九、リリーボマード

五十、太陽堂

五十一、リリーボマード

五十二、太陽堂

五十三、リリーボマード

五十四、太陽堂

五十五、リリーボマード

五十六、太陽堂

五十七、リリーボマード

五十八、太陽堂

五十九、リリーボマード

六十、太陽堂

六十一、リリーボマード

六十二、太陽堂

六十三、リリーボマード

六十四、太陽堂

六十五、リリーボマード

六十六、太陽堂

六十七、リリーボマード

六十八、太陽堂

六十九、リリーボマード

七十、太陽堂

七十一、リリーボマード

七十二、太陽堂

七十三、リリーボマード

七十四、太陽堂

七十五、リリーボマード

七十六、太陽堂

七十七、リリーボマード

七十八、太陽堂

七十九、リリーボマード

八十、太陽堂

八十一、リリーボマード

八十二、太陽堂

八十三、リリーボマード

八十四、太陽堂

八十五、リリーボマード

八十六、太陽堂

八十七、リリーボマード

八十八、太陽堂

八十九、リリーボマード

九十、太陽堂

九十一、リリーボマード

九十二、太陽堂

九十三、リリーボマード

九十四、太陽堂

九十五、リリーボマード

九十六、太陽堂

九十七、リリーボマード

九十八、太陽堂

九十九、リリーボマード

一百、太陽堂

一百一、リリーボマード

一百二、太陽堂

一百三、リリーボマード

一百四、太陽堂

一百五、リリーボマード

一百六、太陽堂

一百七、リリーボマード

一百八、太陽堂

一百九、リリーボマード

一百十、太陽堂

一百十一、リリーボマード

一百十二、太陽堂

一百十三、リリーボマード

一百十四、太陽堂

一百十五、リリーボマード

一百十六、太陽堂

一百十七、リリーボマード

一百十八、太陽堂

一百十九、リリーボマード

一百二十、太陽堂

一百二十一、リリーボマード

一百二十二、太陽堂

一百二十三、リリーボマード

一百二十四、太陽堂

一百二十五、リリーボマード

一百二十六、太陽堂

一百二十七、リリーボマード

一百二十八、太陽堂

一百二十九、リリーボマード

一百三十、太陽堂

一百三十一、リリーボマード

一百三十二、太陽堂

一百三十三、リリーボマード

一百三十四、太陽堂

一百三十五、リリーボマード

一百三十六、太陽堂

一百三十七、リリーボマード

一百三十八、太陽堂

一百三十九、リリーボマード

一百四十、太陽堂

一百四十一、リリーボマード

一百四十二、太陽堂

一百四十三、リリーボマード

一百四十四、太陽堂

一百四十五、リリーボマード

一百四十六、太陽堂

一百四十七、リリーボマード

一百四十八、太陽堂

一百四十九、リリーボマード

一百五十、太陽堂

一百五十一、リリーボマード

一百五十二、太陽堂

一百五十三、リリーボマード

一百五十四、太陽堂

一百五十五、リリーボマード

一百五十六、太陽堂

一百五十七、リリーボマード

一百五十八、太陽堂

一百五十九、リリーボマード

一百六十、太陽堂

一百六十一、リリーボマード

一百六十二、太陽堂

一百六十三、リリーボマード

一百六十四、太陽堂

一百六十五、リリーボマード

一百六十六、太陽堂

一百六十七、リリーボマード

一百六十八、太陽堂

一百六十九、リリーボマード

NIPPAK SHIMBUN

Jornal Nipponico de maior circulação no Brasil

Anno XXI

São Paulo — Quarta-feira, 10 de Abril de 1935

Num. 930

NIPPAK SHIMBUN

Proprietário
SACK MIURA
DIRECTOR Pedro Moron
GERENTE Alfredo Takeuchi
Redacção, Administração e Oficinas
Rua da Liberdade, 144-A e 146
Caixa Postal, 375
Telephone 2-3926
Endereço Telegráfico: "Nippak"
SÃO PAULO - Brasil
ASSIGNATURAS
Para o Brasil
Por anno 30\$100
Por semestre 15\$500
Número avulso 5\$00
Para o Exterior 60\$000

Anúncios
Temos à disposição das interessados
uma tabela completa de preços para
anúncios nessa folha. Telephone 2-3926

NOTÍCIAS DO NIPPON

A paz no Oriente

Um porta-voz do governo nipponico declarou, em Tokio, que o Nippon considera o pacto geral de segurança do Extremo Oriente como inutil, tendo acrescentado:

O Nippon prepara-se para manter a paz no Extremo Oriente e os acontecimentos da Europa não podem modificar a política fundamental nipponica.

O Nippon desinteressa-se pelos acontecimentos europeus

A propósito dos rumores ultimamente propagados, de que o sr. Eden conferenciará com o sr. Litvinoff sobre o "Pacto de Locarno do Extremo Oriente", um informante da chancelaria nipponica declarou, em Tokio:

“Não existe, no Extremo Oriente nenhuma cidade como Locarno. Os nipponicos não se interessam actualmente pelos problemas da Europa, cuja situação politica sofre frequentes mudanças que não se lhe pode seguir a evolução.”

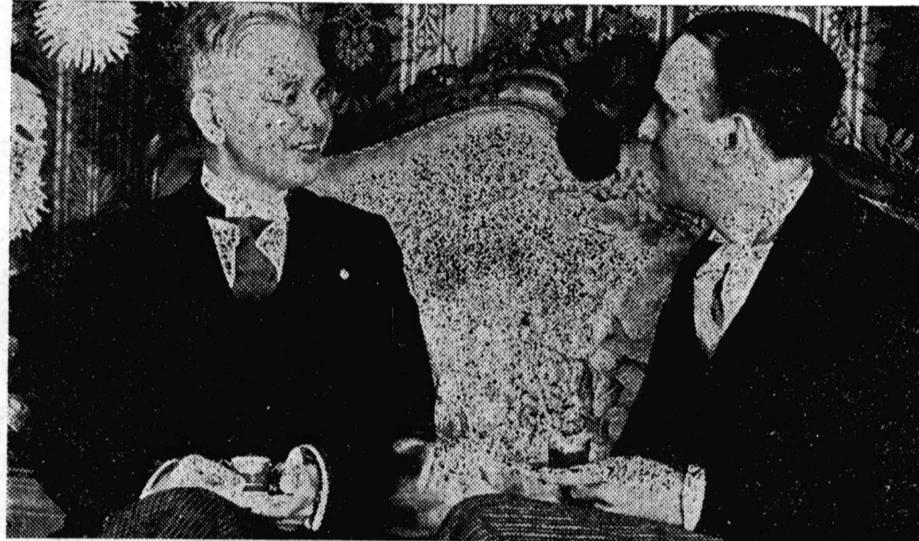
Explosão de um reservatório hydrogenio na Coréia

Communicam os telegramas procedentes de Tokio. O reservatório de hydrogenio a usina de adubos químicos e Konan, na província de Loukyonando, explodiu matando 7 operários e ferindo 4 outros trabalhadores. Cerca de 500 operários sofreram, além disso, ruptura dos tympanos.

A deflagração foi tão violenta que todas as vidraças das casas próximas voaram estilhaçadas. Tomados de temor pânico, os habitantes de Konan refugiaram-se nas colinas das imediações da cidade.

E' hóspede do governo paulista o embaixador nipponico junto ao governo brasileiro

A chegada a São Paulo — Impressões do sr. Setsuzo Sawada aos jornais paulistas --- As visitas efectuadas



S. Excia. o embaixador Sawada em visita ao sr. Interventor Federal

Em visita oficial ao Estado de São Paulo, acha-se nesta capital, a vários dias, o sr. Setsuzo Sawada, embaixador nipponico junto ao governo brasileiro.

Chegado às 10 horas de 3 do corrente a esta capital, foi, o illustre diplomata nipponico recebido na Estação do Norte pelas autoridades militares e civis do governo paulista, alem dos secretarios de Estado do governo Armando de Salles Oliveira.

Em obediencia ao programa organizado, para ser observado durante a permanencia em São Paulo do embaixador Sawada, fez sua excia, a visita oficial e protocolar ao interventor federal, no dia de sua chegada.

A chegada

Pouco antes das onze horas já se achavam no palacio da Cidade, o sr. Armando de Salles Oliveira, acompanhado de todos os seus auxiliares de governo, casa civil e militar, o coronel Arlindo de Oliveira e tenente-coronel Inojosa, commandante e chefe do Estado Maior da Força Pública, respectivamente.

Alguns minutos passavam das onze horas, quando foi ouvido toque de sentido para a companhia de guerra da Força Pública que com uma banda de musica, estava postada em frente ao palacio para prestar os continencia de estylo.

O sr. Sawada desembarcou do carro de Estado, acompanhado do sr. Carlos Mendonça, que está no exercicio do cargo de secretario da interventoria; consul nipponico nesta Capital e seus auxiliares.

Nessa occasião a banda de musica executou os hymnos brasileiro e nipponico.

No alto da escadaria interior o illustre diplomata foi recebido pelo major Othello Franco, chefe da casa militar da interventoria, sendo, entao, introduzido no salão nobre do palacio, onde, em palestra com os presentes, aguardou a chegada do sr. Armando de Salles Oliveira.

O chefe do governo paulista veiu ao encontro de s. exa.,

em companhia do sr. Marcio Munhoz, secretario da Educação e Justiça. Foi o embaixador apresentado pelo titular da Justiça ao chefe do executivo paulista e membros do governo.

O sr. Setsuzo Sawada demorou-se, então, em palestra com o interventor, sendo servido á sua exa. uma chicara de café.

A retirada do embaixador nipponico, foi observado o mesmo ceremonial da entrada.

Falando à imprensa

No dia de sua chegada, o sr. Setsuzo Sawada concedeu, aos representantes da imprensa paulista, uma entrevista colectiva.

Recebidos pelo sr. Fumio Miura, secretario da embajada nipponica, foram os jornalistas conduzidos á presença do embaixador nipponico, que, num esboço e resumo geral fez transparecer, nestas palavras, a sua satisfacção em conhecer São Paulo:

— Conheço S. Paulo mesmo antes de conhecer o Brasil e a America do Sul para onde vim agora pela primeira vez. Na minha patria este grande Estado da Federação brasileira é conhecido em todos os seu detalhes. O meu povo segue a vida deste Estado, com grande interesse, pois aqui se encontram mais de uma centena de milhares de compatriotas nossos que se correspondem constantemente com os seus parentes.

As homenagens que estou recebendo em S. Paulo eu as recebo para a minha patria e o meu povo e peço dizer aos paulistas que estou emocionado com o carinho com que venho sendo tratado. No Nippon ha um proverbio popular que diz: "O Monte Fushi é mais baixo visto do que descripto", quer dizer que a fama da sua altura parece exagerada quando o vemos de perté, sentimos que é diminuido pela realidade. Porém o que se passa com S. Paulo é completamente diferente. A sua realidade ultrapassa ao que se diz lá fóra, pois, ao chegar ao Rio ha mazes, procurei interir-me do que é realmente este Estado e os dados que colhi deixarem todas as minhas optimistas suposições em situação de inferioridade".

Neste ponto a palestra foi interrompida pelo secretario da embaixada que ofereceu um "cock-tail" aos jornalistas. E o sr. Sawada retomando o fio da palestra, prosseguiu:

Ha 26 annos que milito na diplomacia, tendo servido em varios paizes da Europa, Asia e America do Norte. Cuvia constantemente falar do Brasil e das suas imensas possibilidades, e, hoje digo, com franqueza, que, realmente este pais é privilegiado. Quando aportei ao Rio de Janeiro já trazia no meu cabadal de conhecimentos muitas idéias exactas sobre o Brasil e principalmente S. Paulo, porém a minha expectativa tem sido excedida.

E agora posso afirmar que o proverbio nipponico está desmentido. "O Monte Fushi é mais alto quando visto do que descripto"...

Uma das circunstancias que desperta a atenção dos nipponicos para o Brasil é o grande numero de meus compatriotas que aqui se acham. As cartas que elles escrevem para os seus parentes é a melhor propaganda que se faz neste grande pais em minha patria. E lá o interesse pelas causas brasileiras é immenso e milhares são os nipponicos que desejam para aqui transladar".

Visitas

Em suas visitas ás diversas organizações bandeirantes, o embaixador nipponico tem mostrado amplamente satisfeito com o que lhe é dado apreciar nas grandes erigidas pelo povo paulista.

Tanto em suas visitas officiaes como nas de caracter oficial, o sr. Setsuzo Sawada tem sido acompanhado pelo vice-consul do Nippon em São Paulo, algumas figuras de destaque da colonia nipponica e dos representantes da Casa Civil da Interventoria do Estado.

No dia de sua chegada esteve em visita ao governo do Estado, ao Museu do Ipiranga, oferecendo, na tarde desse dia, um "cock-tail" no Esplanada Hotel, onde se acha hospedado, aos representantes consulares acreditados pelo governo brasileiro. A noite horas da noite desse dia, o governo paulista ofereceu ao illustre diplomata,

Sentimentos de afecto entre nipponicos e brasileiros

O embaixador Gurgel do Amaral, que até ha pouco exercia o seu posto no Imperio do Sol Nascente, concedeu ha dias, uma entrevista á imprensa cariora, acerca dos esforços dispendidos pelo grande imperio oriental, em prol do extreitamento de suas relações com o Brasil.

São estas as palavras proferidas pelo embaixador Gurgel do Amaral:

— "Em pouco mais de 7 meses, introduzimos no Nippon, para fins especiaes, os primeiros carregamentos de algodão, no valor de 50.000 libras esterlinas.

Considerado producto excellento o algodão brasileiro, auxilta as remessas para aquelle paiz.

Conseguimos que as compagnias de navegação reduzissem de tal modo as suas tarifas, que uma tonelada de algodão é transportada para os centros commercias de Yokohama e Kobe, por um preço considerado inferior ao que se tem conseguido para o nosso producto na Inglaterra."

Salientou o embaixador Gurgel do Amaral que trabalhava nesse sentido, quando o colheu a lei de aposentadoria.

Trabalhava tambem em favor do incremento da exportação do manganeze brasileiro para o Nippon.

Dera o impulso inicial e, agora, espera que o seu sucessor em Tokio saiba levá-lo a bom termo".

Harmonia

— "Ha absoluta harmonia e cordialidade nas nossas relações com o Nippon.

Os interesses emigratorios nipponicos sofreram, naturalmente, pelo effeito das ultimas medidas constitucionaes que existem entre os dois povos".

no Brasil, que reduziram as correntes emigratorias de todos os povos para o nosso paiz.

Mas, tendo sido essas medidas de caracter geral, não podiam destruir a harmonia reinante, que, aliás, se mantém em excellentes condições.

Ha, no Nippon, um sentimento de grande apreço e respeito pelo Brasil e pelos brasileiros, em proporção igual aos nossos sentimentos, no mesmo sentido, em relação áquelle nobre paiz."

A missão nipponica no Brasil

Alludi, em seguida, o embaixador Gurgel do Amaral, à vindia de u'a missão nipponica para o Brasil.

Disse que esse facto é mais uma demonstração da importância que o nippon tributa ás suas relações commerciales com o nosso paiz.

Acrescentou saber que a mesma é composta de elementos de alto prestigio nos meios industriaes e commerciales no Nipon.

Qualidade dos nipo-nipponicos

Referiu-se depois o embaixador Gurgel do Amaral á qualidade de organização e trabalho dos nipponicos e ás suas iniciativas em todos os ramos da actividade humana, terminando:

— "Como embaixador do Brasil no Nippon, nestes ultimos 4 annos, só tive motivos de satisfação e regozijo, ao verificar, a todo momento, os sentimentos de afecto que existem entre os dois povos".

O algodão brasileiro no Nippon

A embaixada do Brasil em Tokio acaba de remeter um recorte do jornal "The Japan Advertiser" em que aquele jornal encarece o desenvolvimento que vem adquirindo a cultura e subsequentes producção e exploração do algodão, em São Paulo e nos Estados do Norte do Brasil.

Anteve, outrossim, no producção brasileiro o maior concorrente, em preço e quantidade, ao seu similar americano.

O referido jornal commenta, pela seguinte forma, o incremento tomado pela cultura do algodão no Brasil:

"O Estado de São Paulo ocupa o primeiro posto na producção do algodão. Quando, ha cinco annos, o governo brasileiro pôz em execução o plano de valorização do café, medida que provocou o retrahimento no plantio do producto, o Estado de São Paulo iniciou, em grande escala, a cultura do algodão e aos componentes da embajada.

No dia 5 deste mes, ultimo dia de sua visita em caracter oficial, esteve o sr. Setsuzo Sawada no Instituto do Butantan, na Sociedade Cooperativa Agricola de Cotia, em Pinheiros, e na Bolsa de Mercadorias.

No dia 6, o sr. Setsuzo Sawada visitou as sedes da Sociedade Nipponica de Beneficencia, Liga dos Amigos da Escola Nipponica, ao terreno destinado á construção do Hospital Nipponico em Villa Marianna e ás 19 horas desse dia compareceu á recepção oferecida pela colonia nipponica no Clube Nipponico.

No dia 7, domingo, sua exa. attendedeu a diversos convites de visitas particulares.

No dia 8, o illustre visitante embarcou para Campinas, onde visitou a Fazenda Monte do Este, a Companhia de Fiação de Seda — duas organizações nipponicas — regressando á tarde para esta capital.

Hoje, dia 10, seguirá para Santos, de onde, amanhã, a bordo do "Massilia", rumará para o Rio de Janeiro.

As cifras de producção do algodão no Brasil, em 1934, foram estimadas em 620.000 fardos, contra 160.000 em 1933.

O mesmo jornal que o

algodão brasileiro, sendo superior ao americano, conforme as opiniões dos technicos,

animou os importadores nipponicos a proporem, aos interessados em São Paulo, a compra de todo o excesso da producção daquele Estado,

sob certas condicões de reciprocidade.

農產物一般
委託販賣
賴信商
店
郵便局
アミンガバウ
七街
七七八一八